

お嬢様は

ビツのアイドル!

小説 あらおし悠

挿絵 草生明

立ち読み版



序章	お嬢様とアイドル	006
第一章	アイドルの正体・お嬢様の秘密	018
第二章	メイドさんの秘めた想い	073
第三章	お嬢様の仮面・アイドルの素顔	117
第四章	アイドル替え玉作戦	163
第五章	お嬢様で、アイドルで	204
終章	お嬢様とアイドル。今日はどっちでする？	248

登場人物紹介

Characters



なるたきあやね
鳴滝彩音

涼香のメイド兼、いりすのマ
ネージャー。しっかりしてい
るが、融通が利かない一面も
見せる。

となみゆうや
戸波佑弥

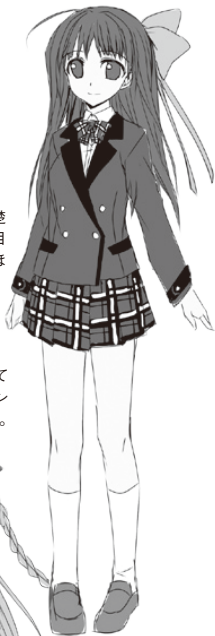
アイドルマニアの少年。今は
いりすに夢中であるものの??

さんのみやりょうか
三之宮涼香

大会社の社長のお嬢様。清楚
で真面目、学園でも常に注目
的。ちょっと天然でほわほ
わなところも。

あまみや
兩宮いりす

「虹の国」から日本に留学して
いるアイドル。ハイテンション
な芸風だが歌唱力は天下一品。



運転手は、あの怖いメイドさん。確か彩音とかいう名前だったか。名前より、ナイフを突きつけられた方の印象が強く、トラウマを刻み込まれた気分です。身体が竦む。

そして後部座席には、涼香が並んで座っていた。今はいりすの変装を解き、ワンピースの上にカーディガンを着ている。だがこちらにも、心なしか顔が強張っている。

いりす落下の件は彼女がうまく立ち回って大事に至らず、イベントは無事に終了。なのに、会場を出てから、車内はずっと重い無言が続いていた。

(機嫌……悪いな。やつぱり、胸を触ったこと、怒ってるのかなあ……)

彼女には、格好の悪いところばかり見られている。人づきあいに疎い生活をしてきたせいで、こんな時、どう対処すればいいのか皆目見当がつかない。

それにしても、どこに連れて行かれるのだろう。さっき門のようなものをくぐったが、それから約三分、ずっと林の中の一本道を走り続けている。

「あの……どこへ行くの、かな？」

「いえ、もう到着いたしました」

涼香に尋ねたのに、メイドが答えた。バックミラー越しに鋭い眼光で、大切なお嬢様と口をきくなと言わんばかりに威嚇してくる。どう考えても、初対面時の悪印象のせい。メイドさんにとつての佑弥は、無断で車に乗り込んだ不審者以外の何者でもない。

「はあ……。あ、いやだから、どこに着いたのかを聞いて……」

「おうちよ、わたしの」

やっと口を開いた涼香が前方を指差す。その先の光景に、佑弥は言葉を詰まらせた。車が必要な広大な敷地に。木立の中に現れた、重厚な石造りのお屋敷に。

(こ、これが三之宮さんの……!!)

学園の校舎ほどもある、三階建ての大豪邸。窓という窓にはバルコニー。壁一面を覆う緑の蔦が、この屋敷の積み重ねてきた歴史を演出し、これはもう、お城だ。

車から降ろされると、その威容は遠方から見た時の数倍の圧力でのし掛かってきた。背丈の倍はある重厚な玄関ドアは、小市民の侵入を拒んでいるようにさえ思えてくる。

「さあ、遠慮なく入って」

家の中に招き入れられた佑弥は、さらに怖気づいていた。精緻な彩色の壺や、赤い絨毯の廊下の壁に飾られた、巨大な絵画の数々。来てはいけない別世界に迷い込んでしまった感覚に陥り、感心するより逃げ出したい気分だ。

(か……帰りた……!)

しかも、三階にあるという涼香の部屋へ行くために使用したのは、階段ではなく、エレベーター。古いデパートにあるような年代物。こんなところにも、家柄の古さが窺える。

「彩音さん、お茶はいいわ。……戸波くんと大事なお話があるから」

「し、しかしお嬢様……!」

一緒にエレベーターを降りようとしたメイドを、涼香が人払いするように手で制する。

もちろん彼女は反発した。どこの馬の骨とも知れない男と二人きりにする不安は、佑弥にも理解できる。しかしメイドは、背筋を伸ばし、自然体で佇むだけの主に、それ以上の反論ができない様子。

「しよ……承知いたしました。何かご用があれば、お呼びください」

不服を滲ませながらも、彩音は大人しく階下へと戻っていった。

(……ご主人様の言う事は絶対ってことか……。こんな家で、娘がアイドルやりたいなんて言い出したら、そりゃ反対されそうだ)

「……さあ、どうぞ」

だが、涼香の私室へ案内された途端、それまでの緊張が嘘のように吹き飛んだ。重厚な扉の向こうは、いかにも名家のお嬢様らしい、白を基調にした明るい空間。ふかふかの絨毯に天蓋つきのダブルベッドなど、それだけなら小市民の緊張感は続いていただろう。

「こ……これはっ!!」

佑弥が眼を見張ったのは、埋め込み型の棚を埋め尽くすように並べられた、レコード、CD、ビデオテープやDVD、そして写真集、雑誌といった書籍の数々。それら全てが、アイドルに関するものだったのだ。しかも、主に女の子の。そして、七十インチテレビとオーディオセットが、それらをベッドから鑑賞できるように配置されている。

「すごい……凄いよ三之宮さんっ!!」

佑弥のテンションは百八十度転換。思わず棚に飛びついて、彼女のコレクションを隅か

ら隅まで眺め尽くす。自分たちが子供の頃に見ていたものは当たり前。生まれる前のレコードまである。お嬢様が財力にものを言わせてとひがむこともできるだろうが、歌手、グラビア、バラエティと、年代順に整理された自分以上のマニアぶりに、感動を禁じ得ない。

「あの……」

「あ……ご、ごめん！ 失礼しました！ でも、あんまり凄くって……」

背後からの遠慮がちな呼び掛けに、興奮状態から我に返る。一部分とはいえ、女の子の部屋を不躰に眺めるなんて。冷や汗を掻きながら振り返ると、涼香は広いベッドに腰を下ろして俯いていた。息苦しうに、ワンピースの胸をキュッと掴んで。呼吸も荒く、耳まで真っ赤に染まっている。

「ど、どうしたの三之宮さんっ！ ……具合でも悪いの？」

心配して半歩足を出しただけで、涼香の身体は弾かれるように後ずさった。まるで暴漢にでも襲われたような、怯えた眼に当惑する。そんなに胸を触られたのが気味悪かったのかと、佑弥の方がショックを隠せない。

「あの……ごめん！ 俺、やっぱり失礼なことを……」

「ち……違うの戸波くん！ そうじゃないの。そうじゃなくて……」

カーディガンを脱ぎ、ワンピース姿になった涼香が、そつと手を握ってきた。軽く引つ張り、隣に座るように促す。女の子と並んでベッドにだなんて、経験したことのない緊張に、ロボットのようなきこちなさで腰を下ろした。彼女に近い左腕が、女の子の存在を意

識するあまり、痛いほどの痺れを感じる。

「三之宮さん、あの……」

「戸波くん……さつき、わたしの胸、触ったでしょ？」

言葉を探す佑弥を遮り、いきなり涼香が核心を咬いた。言葉の槍が罪悪感を直撃し、ベッドから滑り落ちそうになる。

「うあああ……！ ご、ごめんっ……でもそれは……！」

「あ、違うの！ 怒ってるんじゃないわ……」

細い眉を、困ったような、泣き出しそうな八の字に下げ、ズイツと顔を寄せてきた。

「わたし……変なの。戸波くんに触られてから……む、胸が、ドキドキして、ウズウズして……落ち着かないの！ ど……どうしていいか、分からなくて……」

それだけを一気に捲し立てると、彼女は耳まで真っ赤にして黙り込んでしまった。疼くという自分の胸を掻き抱き、佑弥の肩に頭をつける。

「え、いや……でも……俺にどうしろって……」

しばしの沈黙。涼香は、佑弥の胸に顔を埋めるようにして、背中に腕を回してきた。そして震える唇で、ためらいながら、耳を疑うことを口走る。

「また……触ってみて」

「触っ……!!? そ、そんな、ご冗談を……」

佑弥の声も震える。彼女の言葉は理解できる。しかし、秘密を共有したとはいえ、まと

もに言葉を交わすようになってまだ日が浅い。そんな女の子の胸を触って欲しいと言われても、できるはずがない。そこまで佑弥の腹は据わっていない。

「お願い……。おっぱい疼いて、どうにかなっちゃんそう……。せせ、責任取って！」

責任。突然の展開に戸惑っていた佑弥には、それはむしろ、背中を押してくれる口実となった。触りたい。あの心地よかった胸が、据え膳となつて差し出されようとしている。

「……いいいの？ ……本当に？」

生睡を飲み込みながら、念を押す。喉は震え、声も裏返つて格好がつかない。それでも彼女は小さく頷くと、小刻みに震える手で佑弥の手を取った。自らの膨らみに誘い、疼きを鎮めるようにグッと押しつける。

「あ……」

声を出したのは、どちらだったのか。それすら分からないほど、佑弥も涼香も極限まで緊張していた。さつき、アクシデントで触れてしまった女の子の胸。外見だけでも十分すぎるほどのサイズを誇る涼香の乳房。しかし実際に触れたそれは、想像以上の重量感と、そして綺麗な半球の形を掌に伝えてきた。薄衣の下が、少し硬い。それがブラジャーだと気づいた佑弥は手を強張らせ、思わず膨らみを鷲掴みにした。

「あ……はあ……ンッ！ はああああ……」

「あっ、ごめん三之宮さん！ ……だ、大丈夫？」

服の上から触れているだけで、涼香の吐息が熱病のように熱い。顔や首筋から、滝のよ

うに汗が流れ落ちる。異常すぎる反応に心配になって尋ねると、彼女は首をふるふると振り、潤んだ瞳で佑弥を見詰めた。

「だ……めえ……。ダメなお。うずうず、全然止まらないのお……」

本当に具合が悪いのではないだろうか。佑弥は本気で思った。なぜならば、辛つらそうな涼香が首を佑弥の肩に預け、ワンピースのボタンをプチプチと外し始めたからだ。

「な……何して……!!　だ、駄目だよ三之宮さんっ！　そそそ、それ、ダメだって！」
動けない。口では制止しながら、本能が少女の胸をはだける姿を見たがっている。

「はあ……」

熱い溜め息と共に、襟元が開かれた。鎖骨の華奢なラインが、桜色に上気した肌に艶なまめかしく浮かぶ。それだけでも生唾ものなのに、細やかな刺繍のピンクのブラジャーから眼が離せない。切れ込みのような深い胸の谷間に、気が遠くなりかける。

「……いいよ」

吸い込まれるほど乳房に見入っていた佑弥の頭の上で、消え入りそうな囁きが響いた。その声に誘われるように、彼女の細い肩を抱き寄せ、ブラ上から膨らみを包む。たったそれだけで、倒れ込むほど大きく喉を仰げ反らせる涼香。

「あ……は……」

切なげな喘ぎが、誘うように震える睫毛が、佑弥を奮い立たせた。下からブラの内側に指を滑り込ませ、豊かな半球を持ち上げるように揉みしだく。

(な……何してるんだ、俺……!)

自分の中に潜んでいた、野獣のような欲求に恐れおののく。それでも、掌に吸いつく涼香の肌の瑞々しさ、マシユマロのような柔らかさに、佑弥は完全に心を奪われていた。身体が、手が、自分のものではないように、勝手に動く。

「あ、や……。そんな……と、戸波、くん……!」

涼香も、右に左に身を振って、佑弥の手から逃れようとしている。だが、抵抗は極端に小さい。突き飛ばそうと思えばできるのに、むしろ身体をすり寄せてくる。

その動きに乗じて、丸みの頂上に手を滑らせた。硬くて小粒な突起が、掌の中心に当たる。正体の見当はついていないのに、確かめずにいられない。ゴムのような感触のそれを、二本の指でキュツと摘む。

「ふあッ!? きゅうああああッ!」

甲高い悲鳴と共に、弓なりに反った涼香の背中が強張った。

(うわああ……触っちゃった……触ってる……! ささ、三之宮さんの……っ!)

女の子の身体で一番興味を引かれていた乳房。その中心の秘めた肉蕾。まして、この手の中にあるのは、憧れのお嬢様のそれなのだ。畏れ多いと思うと同時に、その弾力を楽しまずにいられない。彼女の激しい反応に気をよくして、むにむにクリクリと弄ぶ。

「そこ、ダメッ、そんな、おっぱい……ち、乳首……ちくびが、ひ、ひッ、ひいんっ!」

「ど、どう、三之宮さん……ウズウズ止まった?」

「わ、分かんない……分かんないよお……ふああああ……」

それは佑弥も同じだった。頭も目玉もぐるぐる回って、自分でも何をしているのか分からない。切なげに身体をくねらせながら、彼女が腰に腕を回してくる。一分の隙もなくピツタリと密着し、触れている部分の体温が際限なく上昇していく。あまりの熱さで身体が溶けそうだ。

「はあ……ン、ふあああ……。と、戸波くん、これって……」

涙をいっばいに溜めた涼香が、佑弥の股間に何かを見つけた。たおやかな手が、それをするつと撫で上げる。

「あっ……はあああ……」

腰を包み込む甘い快感。涼香が、腫れ上がったジーンズの股間を弄んだ。自分でも気づかないうちに、硬く、大きく膨張した肉欲勃起。彼女はそれを掌で包み込み、転がすように優しく撫でる。

「これ……わたしがステージから落ちた時、お尻に当たってた……」

「ご、ごめ……ごめん、ふうあうツ!!」

やはり気づかれていた。バレてしまったショックや罪悪感を覚えるより先に、頭をピンクの霧もやが覆い尽くす。軽く触れられているだけなのに、早くも射精しそうな勢いで勃起が疼いた。先端から先触れ粘液を吐き出しトランススをべったり濡らす。

「ずるい……」

股間を見下ろしていた涼香が、拗ねるように頬を膨らませた。

「わ、わたしはっ、おっぱい触られて恥ずかしい思い、してるのに……！ ととと、戸波くんも見せてくれなきゃ、ずるい！」

「ええええっ!!」

こんなものをお尻に当てるなんてエッチだ、とかひどいとか非難するなら話は分かる。しかし涼香は、問答無用でジーンズを脱がせにかかった。そもそも、触れとお願ひしてきたのは涼香の方ではないか。それに、佑弥は彼女の乳房を直視していない。乳首だって、触っただけで色も形も確認していないのに。理不尽で不公平な要求に戸惑っている間に、彼女は完全勃起状態の肉棒を取り出してしまった。

「——ヒィッ!?!」

自分で出しておきながら、異性の性器の威容に、涼香は身を竦ませる。

「こ、これが男の子の……? ウソ、だって、こんな………大きい……」

お嬢様とはいえ、彼女だって年頃の少女だ。ある程度の知識は持ち合わせているはず。それでも、先端から涎を垂らしながらビクビクとしゃくり上げる実物の肉塊に、すっかり怯えてしまっている。

「……やっぱりやめよう、こんなの、お嬢様が触るものじゃ……」

ペニスを恐がる涼香を氣遣ったつもりだった。正直に言えば佑弥だって、不意打ちで性器を晒され、顔から火が出るほど恥ずかしい。だが、その言葉は逆効果だったようだ。

「お、おっぱい触られた仕返し……する……するのお！」

お嬢様モードがおっとりしているから忘れていた。彼女は——涼香は、親に逆らってでもアイドルの道を選ぶ負けず嫌い。意志の強さは、佑弥ごときの比ではなかった。しなやかな指を、肉柱に絡みつける。ペニスの芯に甘美な疼きが生まれ、腰まで痺れる。

「うっ……くあッ！」

「……あっ!! ご、ごめんなさい……!!」

とはいえ、少女にとって初めての異性の性器。思わず漏らした呻きに驚き、指を引っ込めてしまう。だが今度は、佑弥の方が収まりがつかなくなっていた。初めて触れた、女の子の手。そんな気持ちのいいものを、みすみす逃すなんてきはしない。

「……やっぱり、怖い？」

続けるかやめるか、その決断を委ねる。お嬢様のプライドを見越して、気遣うふりで涼香を挑発したのだ。卑怯だと思った。それでも彼女の愛撫が欲しくて堪らない。

「あ……あ……あ……」

涼香の瞳が、恐怖心と欲情のはざままで揺れる。佑弥は彼女の手を取り、そっとペニスを握らせた。わずかに抵抗する腕を押さえ、脈打つ肉塊に、しっかりと掌を吸いつかせる。

「あ……ああ……はあああ……」

熱い吐息が、佑弥の首筋をくすぐった。強張った腕が次第に緩む。逆に、掌はペニスを握り締めてくる。自分の意思で、しっかりと、力強く。

「熱い………あああ、硬い………。これが、男の子の……」

「そうだよ、それが……僕の……うっ！」

指の腹が亀頭のカ리를軽くくすぐる。それだけで、張り詰めた勃起が爆発しそうになった。もう長くはもたない。焦った佑弥は、彼女の胸に手を戻した。涼香が眼を閉じ、甘い息を吐く。膨らみを揉みしだくりズムに釣られるように、彼女の手も動き出す。握り締めた肉棒を、強弱つけて扱しらき始める。

——ぐにゅ、じゅる。むにゅにゅ、ぐちゅちゅる。

二人は音楽を奏でるように、交互に手指を動かした。ひと揉みごと、ひと擦りごとにテンポが速くなる。愛撫の力も強くなる。

「ああ、はあああ……。い、いいよ三之宮さん。気持ちいい……ッ」

「い、いいの？ 戸波くん……わたしも……ああ……そう……おっぱい、いい……」

初々しい、とは言い難い愛撫に二人はのめり込んでいった。見詰め合い、互いに敏感なところを探り合って相手を責めることに夢中になる。佑弥が乳首を転がせば、涼香は指に粘液を絡めて亀頭に塗りつける。ぎこちないながらも、初めての経験に昂って、何をされても気持ちがいい。息が荒くなってくる。腰に力が入らない。

欲情に濡れた視線が絡み合う。はあはあと熱い吐息が近づく。

「はあ……ン、ふああああっ！ ゆ、佑弥くん……佑弥くん！」

「おあっ……んむああ……！ りよ……涼香……さん……んむっふうッ!!」

無意識に、互いの名前を呼び合った。自然に、唇が吸い寄せられる。蕩けそうに柔らかい感触に口を塞がれ、頭の中が完全に真っ白になる。

「りよ、涼香さ……んむっ、りようか……れる、ちゅぶっ！」

「ひゅうあああ、佑弥くん……ん、ちゅッ、ちゆる……じゅ、じゆるる！」

舌を突き出し、絡め合う。ファーストキスとは思えない激しさで、溢れる唾液を啜り合う。あまりの快感に身体を支えられなくなつて、二人はベッドに横倒しになつた。それでも愛撫を続けながら、首をくねらせ唇を啄み合う。

（俺、涼香さんにチンポ触られながらキスしてる……お嬢様と……いりすと……夢だよ、こんなの……夢に決まつて……はあああ！）

夢なら、覚める前にもっとキスしたい。乳首を摘むと、彼女の唇がチュッと舌に吸いついた。ペニスを扱く手も速くなつて、腰の奥から何かが湧き上がってくる。グツグツ沸騰するような熱さに、ペニスが限界を迎えようとしているのを感じる。

「んむああ……しゅごい……！ 佑弥くんのおちんちん、わらひの手の中でピクピクつて……ふああああ、熱い……しゅごい、しゅごいのおおッ！！」

涼香も完全に理性が飛んでいる。無我夢中で肉棒を抜き、卑猥な粘液を擦りつける。

——ぐちゅ、ぐちゅっ、ぐじゅるぐじゅッ！！

「ぐあああう、おううあッ！ あああ……ダメ、涼香さん！ 俺……俺、もう！」

テクニクなど皆無の目茶苦茶な愛撫に、佑弥の下半身が歓喜の悲鳴を上げる。少女に



抱きつき、しがみつくように胸を捏ね、カクカクと腰を振りながら絶頂へと走り出す。

「お、おっぱい……ふあああん！ ゆ、佑弥くん……佑弥くん！」

「うあッ、そんな激しくッ、ああ……出るッ、出ちゃうよ、出る……出るッ!!」
——どびゅつびゅるびゅるッ、びゅるるるうううッ!

「うあッ、おうあああああッ!!」

打ち上げられた魚のように腰を跳ね上げ、白濁液が飛び出した。ロケットの噴射のような勢いで、ベッドに、ワンピースに、そして少女の汗ばんだ手に、糊のようにねっとり濃厚な子種汁を貼りつける。

「きゅああん！ あッ、あッつうういッ！ ひイイイああッ、あああああッ！」
佑弥に乳首を抓られ、一拍遅れで涼香も背中を仰け反らせた。眼を大きく見開いて、小柄な身体をヒクヒクと激しく痙攣させる。

「な……なにこれえ……。お……おっぱい、だけで……イッチャった……よお……」
「お……俺も……。こ、こんなに、気持ちいい……。なんて……」

鈴口から、二度三度と精液が小さく飛び出す。快感が激しすぎて勃起が治まらない。
「あは……。佑弥くん……おちんちん、しゅごい……」

涼香が、妖艶に、それでいて無垢な笑顔で嬉しそうに硬直を抜く。佑弥も、愛しい彼女の乳房を撫でる。精液の青臭さに酔ったように、二人は飽きることなく唇を貪り続けた。

「何だよ、お前は!？」

「と……戸波さん……!？」

急に割って入った佑弥に、双方から不審の眼が向けられる。それはそうだろう。部外者の仲裁など不快なだけだ。学生たちはもちろん、かばっているはずの彩音の視線も、刺すように痛い。顔では笑ってみせても、誰も味方がいなくて泣きたい気分だ。

だが、人垣の向こうに見えたスタッフの呆れ顔に、恐怖心より焦りが生じた。こんな馬鹿げた騒ぎのせいで、いりすが芸能界から干される羽目になったら大変だ。

「えーっと……迷惑かけてすみません。この人、いりすのファンなんですけど、ちよつと熱狂的すぎるっていうか。ね、この格好見ればわかるでしょ？」

「な……失礼なっ!」

もちろん彩音はご立腹。眼を三角に吊り上げている。しかし、ここは黙ってもらおうしかない。佑弥は彼女の頭をグッと掴むと、無理矢理に頭を下げさせた。

「何をするのです、あなたは……!」

「いいから黙って!」

低く鋭い佑弥の声に、彩音の肩が怯えたように小さく跳ねた。怒っていると思ってくれたら幸いだ。実際は、怖くて必死なだけ。そもそも見ず知らずの人と争うなんて、自分の人生において、まったく予定になかったことなのだから。

「どうしても許せないっていうなら……俺を一発ずつ殴ってくれてもいいですから」

何を馬鹿な。頭を上げようと抵抗する彩音の眼が、そう言っている。

(俺も馬鹿馬鹿しいと思ってるんだから、責めないでよ)

苦笑しながら腕に力を込め、メイドの抵抗を抑え込む。すると、二人の様子の異様さが彼らにも伝わったのだろうか。学生たちの間に戸惑いが広がっていった。

「い……いや、別にそこまでするつもりはないから」

よく見れば、彼らも怖い顔などしていない、普通の少年たち。彩音に頭ごなしに注意されて腹を立てていただけのようなだ。頭を下げられ気が済んだのか、面白くなさそうに文句を言いながらも、何とか立ち去ってくれたのだった。

「ふー。……びつくりしましたね」

きつと、無意識に身体を強張らせていたのだろう。大きく安堵の溜め息を吐くと、全身からドツと疲れが溢れ出た。

「鳴滝さん、もう頭を上げてでも大丈夫ですよ。あぁっ、あの！ すみません、女性の髪をこんな……失礼な真似を……！」

拘束から解放されたというのに、彩音は頭を下げたまま。凝り固まったように、お辞儀の姿勢からピクリとも動こうとしない。

ぼたぼたつと、彼女の足元に、水滴が落ちた。

「鳴滝さ……うわっ!!」

泣いていたのだ。唇を噛み締め、声を出すのを我慢して。それもついに我慢の限界がき

たのか、ぺたんとして地面にお尻をつけて、わんわん大声で泣き出してしまおう。

「ちよ……泣かないで……鳴滝さんっ」

マイクロボスの窓から、ピンクの髪が覗いていた。この号泣ぶりでは、しばらく動けないだろう。いりすに「任せろ」とジェスチャーで伝えようと、彼女は「いりす」としてではなく、涼香として静かに会釈し、車で走り去った。

「さあ、行きましょう。こんなところで泣いてたらみっともないですよ？」

「みっともないのはあなたです！ どうして……どうして、あんな連中に頭を下げないといけないのです！ 悪いのは向こうなのに！」

それはそうだ。しかし佑弥は静かに眼を閉じ、自分の心に確認するように言った。

「……いりすの、ためです」

「それなら、わたくしだって、いつもお嬢様のためを思っ……！」

「彼女のためと思うことと、彼女のためになることが、同じとは限らないから……」

彩音の音が止まった。見上げた瞳が、分からないと言っている。もちろん佑弥にだって分からない。何が彼女のためになるのかなんて。ただ言えるのは、こんな騒ぎが誰の得にもならないことくらい。

しゃがみ込んで手を取ると、半ベソの彩音は素直に立ち上がった。さっきまでの強気が嘘のように、拗ねたように唇を結んでいる。内股で手を繋いで、目尻に涙をたっぷり溜めて、まるで幼い子供が泣きべそを掻いた後だ。

「何が面白いんですかあ……」

クスリと笑ったら、メイドさんの気に障ったらしい。ムツとして睨まれた。

「……あんな騒ぎを起こして……お嬢様に合わせる顔がありません……」

屋敷に戻るか尋ねると、彩音は力なくそう答えた。それならと、気持ちが悪く落ちてくまで佑弥の家で休ませることにした。なにせよ、メイド服の女性が公園で泣いていたら悪目立ちしすぎる。

「三之宮家に比べたら小さい家ですけど……両親とも深夜まで戻らないから、ゆっくりしていただくさい。何なら、晩メシも食べていきますか？」

黙りこくった彼女をリビングに通し、ソファに座らせる。しかし、キッチンで紅茶を淹れて戻った佑弥は、トレイを落とすようになった。

「な……何の真似ですか鳴滝さん!!」

ソファで彫像のようにエプロンを掴んでいた彩音が、絨毯に座り込んでいたのだ。額を床に擦りつけ、いわゆる土下座と呼ばれるポーズで。

「このたびは……涼香さまのご学友に、とんだご迷惑をおかけいたしました……」

声が震えている。自分より長身の女性の背中が、やけに小さい。

「やめてくださいよ。俺、そんなつもりで鳴滝さんを呼んだんじゃないです」

「戸波さまは……わたくしの眼を覚まさせてくれました。お嬢様のためと言いながら、独

りよがりです……浅はかな考えを、看破なされたのです」

「だから、そんな大層なものじゃないんですって！」

しかし彼女はふるふると首を振り、涙を溜めた顔を上げた。謙虚になってくれるのはありがたいが、それにしても極端に振れすぎだ。

「教えてください戸波さま。真にお嬢様のお役に立つには、何をすればいいのかわ！」

「教えるも何も。今日はちよつとやりすぎただけで……鳴滝さんは、いつだってお嬢様が最優先じゃないですか。それは、涼香さんもよく知っているはずですよ」

それでも彩音は納得しなかった。さっきの出来事が、よほどショックだったのだろう。こんなにしおらしく、不審者扱いだった佑弥に頭を下げるほど。きっと、誰かに責められるなんて、初めての経験だったのだ。

「聞けば、戸波さまはアイドルにお詳しいとのこと。芸能界の礼儀や常識を、ぜひともわたくしに伝授いただきたいのです。……お嬢様のためにも！」

「どこからそんな話を聞いたんですか！」

どうせ涼香に決まっているが、お詳しいはないだろう。それに佑弥がしているのは、芸能界云々の話ではない。

（……でも、あの爺さんが任せたっていうのは、こういう意味だったのかな）

普通の、人との接し方。そんなの、佑弥の方が教えて欲しいくらいだ。

「……はあ、仕方ない。分かりましたけど……俺もそんなに詳しくはないから、一緒に勉

強していくつてことにしましょう。あ……でもその前に、その姿勢はやめて椅子に座ってください。でないと、今の話はなしです」

ちよつとした脅し文句に、彼女はあたふたとソファに登った。慌てて正座してしまい、飛び上がって座り直す。そんな有様でも瞬時にスカートやエプロンの乱れを直すのは、さすがプロのメイドさん。乱れているのは、むしろ佑弥の心中だった。

(ああもう……どうして俺がこんなに色々背負い込まなくちゃいけないんだよっ!?)

完全に自分のキャパシティを超えている。それでも嫌な気分にならないのは、彩音が完璧主義の仮面を外し、素顔を見せてくれたからだろうか。

佑弥も彼女の隣に腰をおろすと、腰と腰が触れて、彩音が身体を強張らせる。謝ろうとしたら、その前に彼女が手を握ってきた。

「わたくし……まだお礼をしていませんでした……」

「いいですよ。別にそんな……ッ!？」

柑橘系かんきつのような、甘酸っぱい匂い。頬に柔らかい感触。それはそのまま横滑りして、唇を塞いできた。

「ン……! ちよッ……鳴滝さんっ!？」

「彩音……と、お呼びください、佑弥さま……」

自分の名前を呼べなんて、一時間前とはセリフが逆だ。彼女は、本当にあの彩音なのだろうか。しかし、小さく顔を覗かせたピンクの舌に唇をなぞられると、ゾクゾクする甘美

な痺れで思考が鈍化した。眼を閉じ、彼女の背中に腕を回してしまふ。

気持ちよくて、でも慣れたというには経験の少ない女性の唇。しかし、一人しか知らないそれとは微妙に違う感触で、我に返った。キスに浸りそうな佑弥の脳裏に、お嬢様の顔が閃光のように浮かび上がる。

「……！ ま、待って、俺は……」

肩を押し返そうとして、逆に思いきり抱きすくめられた。胸に当たる柔らかかなふたつの弾力。涼香に勝るとも劣らない乳房をメイド服越しに感じ、体温と心拍数が上昇する。

「は……あ、ふうあ……ッ！」

彩音のぷりつとした唇が、首筋に吸いついた。頸動脈を逆撫でし、ゾクゾク痺れる快感で思わず息を漏らしてしまう。

「……佑弥さまの気持ちは、存じています。ですが、お気になさらないでください。これは、わたくしからの一方的なお礼……。あくまでご主人様へのご奉仕、なので……」
佑弥のどんな気持ちを知って、いつ自分が彼女のご主人様になったのだろう。いくつもの疑問は、口腔に挿し込まれた舌に搦め捕られた。

（お気になさらずって言っても……俺……俺は涼香さんのことが……ああでも！）

ズルッと舌の表面を舐め上げられ、頭が芯から白濁する。涼香を裏切りたくない。なのに、彼女にはない貪るような激しさに抗えない。そんな迷いがキスに出たのか、彩音は佑弥の身体を掻き抱き、右に左にくねくねと顔を傾けて、深く深く舌を捻じ込んだ。

——じゆるっ、ちゅぱっ、じゅぶ、じゆるるるっ！

いきなり彩音が両頬を挟み、佑弥の唾液を啜り上げた。魂まで吸い取るかのような勢いに背筋や腰が快感に震える。さらに、彼女のものとブレンドされ、粘度を増したとろとろの唾液が口の中に戻された。

「おあ……はああ……！」

唾液の甘い匂いが口いっぱいに広がって、視界が酔ったように霞む。そのくせ股間は、痛いほどズキズキと脈打った。容積を増した肉棒が、制服のズボンの中で行き場を失い、痛い。それもキスの快感の前には些細なこと。互いに啄み、下唇を挟んで震わせ、唾液の交換を繰り返す。絡み合う舌で攪拌かくはんされた粘液は白く泡立ち、顎に垂れ落ちたそれを、奪い合うように舐め合った。

「ん……ん、じゅっ……はあ……彩音……さん……」

「佑弥、さま……ふあふ……むううふ、ちゅううウッ！」

涼香とも交わしたことの無い、唾液のぬめりと臭いにまみれた濃厚な口づけ。息苦しくなって離れた唇の間に、どろっと泡立った粘液の橋が架かる。

（お……俺、どうして彩音さんとキス……してるんだっけ……うッ!!）

思考が鈍って思い出せない。淫熱で潤んだ瞳で見詰め合っていると、股間に甘美な疼きが走った。さわさわと、優しい感触が這い回る。勃起の形を確かめるように、ズボンの上から揉みほぐす。想定外の大膽な手つきに、短い喘ぎが堪らず漏れる。

「あ、はあ……ッ！ あ、彩音さんっ！ お、俺のこと、嫌い……だったんじゃ……」

すると彼女は、佑弥の視線から逃れるようにソファから降り、脚の間に身を沈めた。も
の憂げに伏せた睫毛で股間を見詰め、両手の指で股間の膨らみを愛おしそうに撫で回す。

「……本当は、最初から分かっていたんです。あなたが、悪い人間でないことくらい。で
も……許せなかった……」

グツと勃起を掴まれる。反射的に眉を顰めたが、ズボン越しなので痛くはない。それよ
りも、その手から怨念にも似た強い想いを感じ取って身を竦ませたのだ。

「ゆ、許せなかったって……車に勝手に乗り込んだこと？」

「そんなことはありません……」

彼女は、佑弥のベルトを外し始めた。ズボンの前が開かれ、窮屈な空間から解放される
太勃起。佑弥の鼓動が、信じられないほどの速度で鳴り響いた。女性の眼に晒されるのは
涼香で経験済みなのに、初めての時以上に息が詰まる。

それは、許せないという言葉と、そして、激しいキスの後とは思えない瞳の鋭さのせい
かもしれない。殺気すら感じる彼女に、大事などころを握られるのが、怖い。

「失礼いたします……」

彩音はそう言って許しを得ると、トランクスごと、一気にズボンを引き下ろした。

「——！！」

自分でしたのに、出現したものに息を飲む。隠すものなくなった股間の中心で屹立し

た肉ロケットが、バネ仕掛けのように揺れていたのだ。

「大きい……思っていた以上に……」

「そ……それって、俺のを想像したことがあるってこと？」

自分の失言に顔を赤らめ、眼を逸らす。しかし右手は肉幹をしっかり握り、さわさわと緩く撫で扱いた。

「あなたを嫌っていたのは……あなたが、わたくしからお嬢様を奪ったからです」

「奪った？ 俺が!? そ、そんな……涼香さんにとっての俺なんて、お……ふううつ、オモチャみたいなもので……だからっ、ほおおうあつ！」

射精が面白くて遊んでいるだけ。奪ったなんて見当違いも甚だしい。しかし彩音は聞く耳を持たず、肉棒に顔を近づけ、うっとりするような熱い息を吹き掛けた。

「これが……このおちんちんが、お嬢様の心を奪ったのですね……」

「んなっ!! な……なな、なぜ、それを……!」

彼女の何気ない呟きで、ガクガクと口をわななかせせる。キスの興奮がどこかに飛んでしまふほどの衝撃。狼狽する佑弥を、彩音は悪戯っぽい笑みで見上げた。

「ふふっ。あなたが思っている以上に、わたくしとお嬢様の繋がりは深いのです。全部聞いていますよ? ……お嬢様に、射精を見せてさしあげたことまで」

「そ……それは……ああっ、待って、そんな急に……おああつ!!」

突然彩音が、リズムカルに勃起を抜き出した。小指を立て、親指と人差し指で作った輪

で敏感なカリの段差を刺激しながら。前触れもなく与えられた激しい手淫に、佑弥は思わず腰を浮かせた。

（涼香さんが……秘密を漏らしていたなんて……）

彩音が怒るのも無理はない。佑弥は、いわばお嬢様の手を汚した男なのだから。申し訳なさで閉じようとした脚の間に、彩音が身体を割り込ませた。腰を抱え込んで、復讐のように勃起を苛める。

「お嬢様は、ずっとわたくしの……わたくしだけのものだった！ それなのに、いきなり現れたあなたが、わたくしからお嬢様を奪った！」

「お……俺はクラスメイトだったし……い、いきなりってわけじゃ……ほうあ！」

反論は許さない。そう言わんばかりに、肉棒を握る手に力を込める。ただでさえはちきれそうな膨張肉塊が、激しい手淫という甘美な拷問に歓喜の涎を垂れ流す。

「ぐううあつ！ はつぐうううツ！」

「いいえ……分かつてはいたのです。ずっと一緒にいたいなんて、わたくしのわがまま。それに、佑弥さまはお嬢様の秘密を守ってくださいました。……いえ、あのお嬢様が信頼を寄せたのです。それだけでも、あなたを避ける理由なんて、なくなっていたのに……」

そうかと思えば、彩音は裏筋を爪で逆撫でし、ピリピリ痺れる快感でペニスを悶えさせた。責めたり反省したり、情緒が不安定で忙しい。

「そ、そんな。涼香さんは誰にでも優しいですよ。俺だけ特別ってわけじゃ……」

「お人好しなだけで、三之宮の娘がつとまると思えますか？」

息も絶え絶えの佑弥を見上げた彼女の鋭い瞳に、寒気が走る。肉棒が跳ねる。確かに涼香は、ただのお人形ではいられない世界に生きているのかもしれない。お嬢様としても、アイドルとしても。

「ふふっ……心配いりません。お嬢様は、あなたが見た通りの優しいお方です。ただ、簡単に人は心を許さないだけ。それだけに、お嬢様の心を奪った、これが……」

「おあああッ!？」

睾丸を握られた。つぶれるかと思うほどの激痛に飛び上がる。ズルズルと姿勢が崩れ、佑弥はソファに仰向けになった。そして、見下ろした自分の下腹部に眼を丸くする。あれだけの痛みを与えられてなお、凶悪なまでにそそり立つ分身に。

「凄い……お嬢様から伺っていた以上に、硬くて……熱い……」

彩音の眼が、欲情の色に染まっていく。佑弥の感じるポイントを的確に責めてくる。

「彩音……さんっ。こ、こんなこと……今まで、経験……ふううッぐ!」

「もちろん、初めてですわ。キスも……」

膝立ちで覆いかぶさり、舌を挿し込んできた。キスされながら勃起を扱かれ、重なった唇から歓喜の呻きが漏れる。

「でも……いざという時にお嬢様が困らないよう、それなりの知識は溜め込んでありますわ。ふふっ……さあ、佑弥さま……。どんなご奉仕がお望みですか？ どうぞ、わたくし

に……このいやらしいメイドに、何なりとお申し付けくださいませ……」

伸ばした舌をチュツと啄み、髪を撫でながら微笑む彩音。どこまでも主思いの、本物のメイドさんによるメイドプレイに、佑弥は倒錯的に興奮した。快感が現実感を欠乏させ、理性よりも先に欲求が口を開かせる。

「唾……飲ませて……」

クスツと笑った彩音は頬を窄ませ、口の中をクチャクチャと鳴らした。かすかに開いた唇から、泡立った水滴が、キラキラ光る糸を引いて落ちてくる。卑猥な光景に見惚れていた佑弥は喘ぐように舌を伸ばし、その甘露を受け止めた。

「はああああ……お、おいしい……」

もつともつと唇を突き出す。しかし彼女は人差し指でそれを押さえ、淫猥な笑みで鼻の頭に口づけた。

「こんなものでよろしいのですか？ わたくしにも、メイドとしてのプライドがあるので。ふふっ……お嬢様に負けないご奉仕を、わたくしにお命じくださいな」

年上の女性の瞳が、妖しく光る。彼女の甘い唾液をゴクリと飲み込んだ。もちろん希望はある。だがそれをお願いしていいのだろうか。佑弥の逡巡を断ち切るように、真っ赤な舌が、ぼつてりした唇を唾液で濡らした。

「な……舐めて……ください……」

それだけで、通じた。彩音は長い睫毛を伏せて承諾の意を表し、唇を、佑弥の股間に運

んでいった。

「……失礼、します……」

挑発的な瞳がこちらを見ている。吐息が、勃起に近づいていく。先端に溜まった先触れ液の水滴が唇を濡らしたかと思うと、滑るように、亀頭が飲み込まれていった。

「はああああ……ああああ、ああああッ……!!」

童貞少年には、それだけで衝撃的な光景。感動に胸が震えた。横顔を見せた女性が、自分のペニスを咥えている。勃起が彼女の口の中へ消えていく。

「ん……はふううん、む……。じゅぶ……。じゅぶ……。じゅぶ……。じゅぶ、ちゅぱっ」

最初は息苦しそうに眉を顰めていた彩音だが、零れた唾液を吸るのを皮切りに、唇での抽送を開始した。左手は佑弥の腹に、右手は太腿に置いて、ポニーテールが跳ねる勢いで肉のシャフトを激しく扱く。

——ちゅぱ、ずぶっ、じゅぶぶぶ、ちゅぶるうッ！

（あああ……。お、女の人が……。舐めてる！俺のを、こんな綺麗な人が……。ほおうあ！）
憧れていたプレイなのに、気持ちいいのに、興奮しすぎて現実感がない。口腔の熱さで下半身が蕩けそうだ。

「ん……。はあ……。気持ちよくなつてくらふあい……。佑弥ひやま……」

唾液でベタベタになった肉幹が吐き出され、押しつけられた舌がねっとり裏筋を舐め上げる。カリ首の段差を隈なく掃除し、鈴口から溢れる粘液を、音を立てて吸る。

「ちゅぱッ、ちゅ……ちゅるっ！」

「あうッ……お、あ……ふうう……ッく……はがッ……あああつ！」

いくら気持ちよくても、男として情けない声は出せない。それなのに、メイドの気の向くままに弄ばれる勃起が悲鳴を上げる。コチコチに凝り固まった肉棒の芯から痺れる。我慢できない激しい疼きに身体が動く。セックスのように波打つ腰で、卑猥な唇に肉槍の穂先をガンガン撃ち込む。

「ふあ……あむ、ちゅ、れろ」

「あうあつ……舌が……舌が、はッ……ああうッ！」

背中が跳ねた。奥まで飲み込まれた肉の幹に、舌が絡みついたのだ。まるで蛇がとぐろを巻くような締めつけに、亀頭の先から涎が零れる。彼女の口に粘液を飲ませる。

「ふあ……おいひいれふ……佑弥さまのおツユ……チュッ、じゅるうううっ！」

「おあああッ……そ、それ……あ、があああつ！」

太りきつた肉棒から粘液を絞り取るような激しい吸引に、背中が仰け反った。同時に腰の奥から何かが湧き上がる。肉棒の内側を昇ってくる。

「はあああつ！ い……いく……いきます、彩音さん、出ます！」

「ふああいいい……イッてくらふあい……出して……いっぱいらしてくらさあい！」

ガンガンと唇に腰を打ちつける。絶頂の予感に頭の中がピンクに染まる。彩音も欲情に顔を染め、夢中でペニスを捻じ込む。しかし、頭の片隅に残った理性が警告を鳴らした。



口では否定しながら、まるで映像とシンクロするように激しく腰を回転させる涼香。ダンスストレッチで鍛えられた、しなやかな腰使い。強烈に締めつける膣肉内で勃起が嬲り回され、羞恥を煽った佑弥も先触れ液が漏れ続けるほどの快感に呻く。

「おああっ……くっ！」

シーツを握って射精に耐えるが、集中力が続かない。彼女が腰をカクカクと揺らすたびスカートが煽られ、内腿を濡らす蜜の甘ったるさと、ゲリラライブで掻いた汗の匂いが鼻孔をくすぐる。獣のような劣情が体内に渦巻き、居ても立つてもいられない。

「あ……あああっ……涼香さん！」

「きゃあ！」

いきなり佑弥が身体を起こしたせいで、不意を突かれた彼女は大腿開きの恥ずかしい格好で倒れ込んだ。スカートが捲れ上がり、しっかりと生え揃った下腹部の草叢が丸見え。M字になった脚を慌てて閉じようとする前に、彼女に覆い被さった。

「はあ……。涼香さんの、匂い……」

首筋に顔を埋めて深呼吸。ペニスで胎内を掻き回されながら汗の匂いを吸い込まれ、少女の肌が桜色にさっと染まる。乾いていたはずの肌から、羞恥の汗が滲み出る。

「に、匂い嗅いじや、だめええ……。お、お風呂……。お風呂、入れさせてえ！」

「洗ったら、せつかくの匂いが消えちゃうじゃないか。ん……。はあああ……」

「バカバカ！ あ、きゆうううあああ……」

首や鎖骨に舌を這わせる。汗の味は、媚薬のように佑弥の牡を滾らせた。衝動に操られるまま、震える指でブラウスのボタンを外す。純白のブラも強引にずり上げ、ぷるんと飛び出た乳房の間へ、誘い込まれるように顔を埋めた。

「はあ……はあ……っ！ 涼香さんのおっぱい……涼香さんの汗……ッ!!」

唾液の跡が残るほど谷間を舐め回し、口に含んだ乳首をちゅぽつと吸い、頸動脈に沿って首筋を舐める。性に積極的な彼女も、恥ずかしい匂いを知られる屈辱には耐えきれず、ついにメイドに泣きついた。

「お願い、お風呂お……！ あああ彩音さあんっ、佑弥くんが、ふあッ、意地悪するう」
ベッドの縁に腰かけ、ふたりのセックスを見守っていた彩音だったが、泣きごとを言うお嬢様に呆れて肩を竦めた。

「自分から言い出したのですよ？ 今夜は佑弥さまのお願いを何でも聞くと」
「でもでも、こんな……恥ずかし……ふあああんむ!!」

お嬢様の唇を、メイドがキスで塞いだ。言い分を聞いてくれない涼香は不満げに身悶えする。しかし、なだめるように優しく吸われると、たちまち肩の力が抜けてゆく。

——ちゅ……ちゅ、ぶちゅ。

佑弥は、目を丸くした。数センチ前方の至近距離で、お嬢様とメイドの艶やかな唇が重なっている。ぬるぬるねっとり、まるで軟体動物の交尾のように、唾液で濡れた舌が絡み合う。女性同士のキスに興奮し、下半身が異様なまでにいきり立つ。

「……ん……むうっ!!」

勃起を膣肉で包んでいた涼香は、その変化をダイレクトに感じ取った。怯えたような少女の視線が、牡の嗜虐しきやくに火を点ける。佑弥は衝動的に身体を起こすと、彼女の右脚を胸に抱え込んだ。

「涼香さん……涼香さんっ!」

「きゃあああつ! こんな格好……ふああッ?! な、なにこれ……へ、変なところにおちんちん当たって……は……はっ……はいいいいあああッ!」

初めての体位に、涼香がお腹をうねらせ泣き悶える。今までとは違う膣内の場所でカリを擦られ、ペニスも新鮮な快感に身震いする。膣肉を巻き取るように勃起を抉り込ませ、パンパンと腰がぶつかる卑猥な音に酔い痴れる。

「き、気持ちいい……涼香さんの中、気持ちいい……!」

「あ……あッ、ふあ……! 佑弥、くんのっ、おちんちん……おま○こ擦って……もつと、擦って、おま○こ……ひいああああッ!」

愛らしい声が、恥ずかしげもなく隠語を叫ぶ。開いた脚でスカートは裏返し、ブレザーもブラウスも全開、ずれたブラから零れる乳房も肉棒の抽送で重そうに揺れる。自分のペニスで啼く声は、間違いない涼香のもの。なのに、乱れた衣服が佑弥を混乱させる。快感で思考が鈍り、自分が誰を抱いているのか分からなくなる。

「はあ……はあ……君は……誰? 涼香さん? いたりす……?」



その問い掛けに、羞恥に困惑していた彼女の瞳が、小悪魔のように細くなった。唇に浮かんだ薄い笑みが、逆に甘い問いを返す。

「んふぁ……あは。佑弥くんは……あん、どっちが、いい……？」

「涼香さん……いりす？ 涼香さん……？ あ、あああッ！」

分からない。どちらも好きすぎて決められない。快感の中に、苛立ちに似た焦燥が生まれ、肉欲の全てを吐き出すように彼女を犯す。

「ふあああッ！ すごい……おちんちん……太くて、わたしの中……ぐちゃぐちゃあ！」

涼香もシートを握り締め、涎を垂らしながら腰を波打たせた。もう彼女の脚を抱えている余裕もない。ベッドに滑り落とした拍子に結合部が捻じれ、甘美すぎる快感がふたりの身体を電撃のように貫く。

「ひあああああッ!! おま〇こ、おま〇こがあッ！」

四つん這いになった涼香が髪と腰を振り乱した。その向こうの画面で踊る、ピンクの髪の可愛いアイドル。

「いりす……涼香さん……ああ……いりす!？」

「ふふ……おふたりとも素敵ですわ。……ああ、お嬢様のいやらしい割れ目に、佑弥さまのおちんちんが入りして……ああ……」

狂ったように交わるふたりに興奮した彩音が、いきなり、ふたりのアヌスに指を突き立てた。快感慣れした直腸をくすぐられ、頂点まで一気に駆け上がる。

「きゅあああああつ！ お尻ッ！ お尻ダメええええつ！」

「ふぐうあああつ、彩音さん！ ……俺もつ、俺おあああああつ！」

性感が一気に爆ぜた。勃起が躍る。悶え狂う少女の胎内へ熱い欲望粘液が放たれる。

——びゅるるる、びゅる、びゅるるるるう！

「はきゅああッ！ あちゅいの膣に……あちゅいの、ほひゅふああああ!!」

四つん這いの両腕を突つ張り、背中を窪ませる。まるで子種汁を飲み干すように膣肉を蠢かせ、快感絶頂に身体を震わせる。

「ふあああ……」

佑弥も彼女の中に出しきり、ふたりは重なるようにしてベッドに伏せた。息を荒らげ、しかし、休息は許されなかった。

「んふ……佑弥さま……。次は、わたくしが奉仕する番ですわ……」

涼香の股間からずるつと抜けたペニスを、メイドが握る。しかし、萎えかけていたそれは、射精直後の過敏さで痛いほどの痺れをもたらす。

「ま、待つて彩音さん！ 俺まだ……ああ……」

それなのに、彼女の巧みな指使いは、その肉塊に力を取り戻させた。強制的に欲情を再燃させられた佑弥は、虚ろな眼で微笑むお嬢様の見詰める中、脚を広げて待つメイドの中へ、滾る勃起を埋め込んだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は、完全の方向転換でござります。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!